
モンスターハンター・ドキッ！ ロリコンによる小説

オタク戦隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター・ドキッ！ ロリコンによる小説

【Nコード】

N1041I

【作者名】

オタク戦隊

【あらすじ】

新人ハンターリサとその師匠そして師匠を取り巻く少女達とのドッキドキラブファンタジーコメディ略してラブコメです。

第一話・師匠決定（前書き）

この話はモンスターハンターを下書きにしていますが、所々作者の考えが入ってます。こんなのモンハンじゃないと言う人はまわれ右
せずに見て行って下さい。（リピーター希望）

第一話・師匠決定

木々が青々と生い茂り、生命を育む植物が根を張り、気持のよい光が暖かく辺りを照らす。湖にはたくさん魚が泳ぎまわりその透明度は二メートルは在るかと言う深さなのにそこが何も介していないかの様に綺麗に見える。

薬草などは勿論、キノコ類や鉱石まで取れる資源の宝庫……それがハンターの聖地と言われるリドルデから近いリガルデ密林の特徴だった。ただ勿論その分モンスターも多いのだが、何故かここ数年は大型モンスターの発見情報が来ていない。そのために新人ハンターの修練場として定着しつつあった。

今日もそんなハンターの一人リサ・レリルトが足を踏み入れている。モンスター育成学校を次席卒業した彼女はその新人にしては卓越した武器の扱いの上手さにより周りからは神童と持てはやされていた。そのため今日が卒業後初の狩りだというのにランポス五頭と言う無茶をしている。

（ランポス五頭位余裕よ！ 余裕！！ すぐにリオレウスだって狩って見せるんだから！！）

トレードマークである明るい茶色の髪を上下になびかせながら意気込む。少女を纏うのは鉱石を主に使い作られた多くの新人ハンターが最初にそでを通すだろう防具ハンター装備だった。

新人ハンターでも動きやすいように軽くそして、関節部分を柔らかく作り上げられたその一品はハンターのための配慮だろう。その分防御力が下がるが、新人が狩るであろうランポスくらいのモンスターの一撃には耐えられるからである。

しかし、ハンターは死亡率が高くそのうち最も多いのが自分の力を過信したことによる死だ。過信は死へと繋がると教えられているが、自分自身の事はあまり解るものではない……リサも例外では無かった。

直にベースキャンプを飛び出し気持の良い風を受けながら草原を走る。背中には長年愛用し続けた太刀が在った。細長く途中から反り上がった刃は肉を切り裂き、顔すら映す刀身は鏡の如く輝く。鉄刀である。

その自慢の獲物を握りながらリサは獲物を探した。

勿論逸る気持はあったがそんなリサも殺すのを快感と言う変人では無い。勿論罪悪感是在るのだが、既にハンター育成学校で多くのモンスターを殺してきた。最初は食肉用のアプトノスを殺した。次は皮を剥ぐ為にガウシカを、次は使い物にならなくなり殺すように頼まれた竜車に使われていた足が折れもがき苦しむアプトノス。

もう躊躇は無くなっていた。罪悪感はあるとしても割り切っている。だから依頼を早く達成するという高揚感と使命感に取りつかれているだけなのだ。

リサは草原を走った。やがて右手に崖が見えてくる。この向こうには大型モンスターの巣が在る事が多い……行ってみたい気もするがやはり今の装備では危険と判断したのか直に元の目的であるランポスを探すために辺りに目をやった。崖から扇状に広がる陸地は湖と面しそこにはアプトノスが水を飲みに来ている。

(可愛いなあ……)

愛くるしく人畜無害のアプトノスは一部の人々からは熱狂的な人気を受けているのだ。リサはそこまででないにしろ可愛いとは思っている。その為にハンターとしては在るまじくしばらくの間ポヤーっとそちらを眺めていた。後ろからリサを狙う狩人に気づかず……。

「あつ！ ちょっとどこ行くの!？」

突如アプトノスが湖の中に入り始める。それは身の危険を感じた時の行動なのだ。そして刹那ギアアギア！ と声を震わせながらランポスが空中へと飛んだ。

黄色いクチバシには小さく鋭い牙が生え、鳥の様な頭は青い鱗に包まれている。細長い体は空気の抵抗を受け流しより強い攻撃を可

能としていた。リサに迫りくる爪は七本……特に真ん中の三本が発達しており、その鋭さは生身の人なら一撃で葬るだろう。

「えっ!？」

気付いた時には既に時は遅い。眼前にはランポスの爪、しかしリサは超人的な反射神経で咄嗟に横に転がっていた。ハンターの必須スキル回避である。綺麗に一回転して太刀を握った。

「いきなりは卑怯よ!!」

そう言っただ刀を鞘から抜くと同時に斬りつける。綺麗な軌跡を描いた切っ先は銀色の光を描きながらランポスへと向かうがランポスはまるで嘲るかのごとく後ろへとかわす。

かわすとは思っていなかったのかリサは太刀を地面へと叩きつける。大きな隙だ。これを見逃す程この世界は甘くないだろう、すぐに頭をリサの方へと向けたランポスがその強靱な後ろ足で飛びかかってきた。

「ちよつちよつと待って!? キヤア!!」

しかし運良くランポスの一撃もわずかに外れ太刀の上へと着地する。ランポスは前にしか攻撃できないという弱点が在るそのために今がチャンスとばかりにリサは太刀の刃を返して無防備な腹へと切り上げた。柔らかな白い肉質。面白い位にすんなりと刃は侵入した。更に骨の間を通り臓器にまでその一撃は到達する。リサはしかしそのまま太刀に力を与え続ける。

ゴキッ!! いやな鈍い音と共に感触が手に伝わった。刃はそのまま鱗を切つて出てくる。胴体が真っ二つにされたランポスはしばらくあがき続けるがやがて衰弱しその命を消した。

「……倒せた? とつ当然よ!!」

しばらくは茫然としていたようだがやがてフンと無い胸を張ると息を荒くしていった。

「……それにしても学校で倒したのより速かった?」

しかしそんな疑問がリサの中に残る。まあそれは当然だ。学校のランポスはあらかじめ生徒が死なない様に爪を切り体力を弱らせた

のを使用している。実際のランポスとは天と地の差が在るだろう。

リサはしばらく考え込むがやがてまあ良いか！ と気軽に考える
と腰に付けている剥ぎ取り用ナイフを太刀の代わりに手に持った。
そしてナイフをランポスへと差し込もうとした瞬間、後ろから衝撃
が加わった。

まるで大の大人に突進されたような息が気道につまり血がこみ上
げる。背中の中が痛い、熱い。サツとその衝動を利用して一回
転立ち上がると一匹のランポスがまるで家族を愛しむ様に死んだラ
ンポスに頬を寄せている。

（あつ……家族何だ）

その瞬間に罪悪感がドットこみ上げた。だから横からの追撃者に
気付けない。

「あう！！！」

鋭い牙が左手に食い込んだ。血が出る。痛い痛い痛い痛い痛い痛
いたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい！！
！！ そんな感情が頭を満たす。見ればランポスが噛みついていて
さらにその勢いでランポスに押し倒される様に体が地面へと衝突す
る。

全身の空気が抜ける錯覚。鉄を口の中に押し込められたような味
が口内を犯し、恐怖が体を満たす。

（こんな所で死ぬの！？ 嫌だ！！ 死にたくない！！）

リサは駄々をこねる子供の様にランポスを振り払おうと右手でラ
ンポスの頭を殴り足で白いお腹を蹴りあげる。それでもランポスは
決して怯まない。いやむしろ顎に力を加えている。

骨が悲鳴を上げた。リサはいよいよ顔を濡らす程に涙を流し鼻水
を流した。その時だ。何かが飛来してランポスの目に突き刺さる。
それは細いランポスの眼を突き破り反対側の眼から切っ先をのぞか
せた。

血が透明な液体を伴って吹き出る。ランポスはグラリと体を揺ら
すと地面に倒れた。リサは倒れたランポスを見る。まだ子供だ。先

程殺したランポスよりも小さい。

さっきのを親と仮定するのなら、こちらは子供だろう。何故普段は巢から離れない子供やメスが居るかは知らないがリサはまるで人を殺したような感覚に陥った。しかし直に現実へと引き戻される。

ランポスの悲鳴が立て続けに三回起こったからだ。

慌てて辺りを見るとランポスが臥していた。そして一人男が居る。顔こそ見えないが男用の防具を身に纏っている。ハンター達に人気の雑誌狩りに生きるにも載っていた超レアな一品。ディアブロスだ。

砂漠の暴君と恐れられるディアブロス。更にその亜種である黒く荒々しい甲殻をふんだんに使い、大きな二本の角を首に巻く様に肩に付けた見る者を圧倒させる逸品。この世でもディアブロスをそれもGに認定される強敵を狩れる者は十人とみないだろう、それほどの強敵なのだ。

そんな防具を纏う男はやはりそれに見合う技量を持っていた。一見荒々しい攻撃だが、観察眼、早さ、攻撃力、型、柔軟性どれをとっても一流だろう。リサなどまだ卵から足を生やした程度の存在だ。刀身に付着した血を拭いとると男は一步ずつリサへと近づいてくる。顔は防具で見えないが、その鋭い眼光がリサを捉えて離さない。直にリサの目の前まで来ると無言で手を振り上げた。

？ リサは何をするのだろうとそちらに顔を向けようとする刹那ガツンッ！ と鉄拳が降る。防具の上からでもとてつもない衝撃だ。しかしそれでも男は手加減しているのだろうか、特に力を入れているようには見えなかった。

「つつ〜！ いきなり何すんのよ！！」

「何すんのよじゃねえ！！ てめえ新人だろ！？ それなら仲間を組むなり師匠を探すなりしろ！！ それにランポス種の特性を忘れたのか！？ 馬鹿正直に突っ込んでんじゃねえ！！」

男はそう言うつと溜息を吐いた。

「全く……こんなチビすけがハンターになるなんてな。そこまで人

手不足なのかよ……」

「悪かったわね！ これでも次席卒業なのよ！！」

「……ハンター業界もおしまいだな」

男はうんと頷く。リサはそれに対しムキヤー！ と怒りをあらわにしている。

「まあ、今回は運が良かったな……これに懲りたら次からはチームを組んで来るんだな……後殴って悪かった」

男はそう言うのとポーチの中から小瓶と包帯を取り出した。

「回復薬Gと包帯だ。回復薬には殺菌の効果が在るし使え……包帯も巻いておけよ」

男はそれらをリサに握らせると、振り返る。

「後は今日はもう帰れ。ギルドの方も契約金は返すと言っている」

「えっ？ 何だよ？」

「リオレウスが出たのさ。俺はそのために派遣されたんだよ……全くG級ハンターに下級リオレウス何かやらせるなつつうのに……いくら街が近くて危険を排除するためと言ったってなあ」

途中からは愚痴になっていたがリサは戦慄した。そうというのも全ハンターの憧れ、世界に五十人も居ないだろうG級ハンターの一人が今日の前に居るのだ。その腕前は狩れ無い獲物はいないと言われている。

これは見て帰るしか無いわね……。

憧れのG級ハンターの戦い。リサでなくても観たいだろう、それほどのカリスマを持っているのだG級と言う称号は。リサはありがとうと言って帰るふりをしながら約百メートルほど後方から双眼鏡で男の動向に目を凝らしていた。

全く……あのチビすけは俺が気付いていないとも思っているのか？

ディアブロスZ装備の男は溜息をついた。しかし、今更追い返す

ことは出来ない。あと少しでリオレウスは此処に來ると長年の勘が告げているのだ。見たところリグは邪魔になる様な所にはいない。大丈夫だろうと考えると、決戦の準備を始めた。

砥石で丁寧な太刀を研ぎ、回復薬などを出しやすい場所にセットして、投げナイフをベルトに付ける。そしてペイントボールを手に持った。

来る。

辺りの空気が変わった。空の王者リオレウス。その威圧感が辺りに静寂を巻き起こす。音が無くなったかのように消え去りリオレウスの力強い羽ばたく音だけが耳を覆う。

空から赤い塊が降りて來た。鋭い針山の様な鱗と甲殻に覆われ赤と黒の色を纏い、その巨体を空へと持ち上げる大きく力ある翼に、二本の木の様に太く武骨な脚が、ランポスとは比べ物にならない鋭く大きい牙が、見る者全てにその存在を刻む。

「やっと到着か」

男はそう呟くとペイントボールを投げつけた。ベチャっと言う音と共になんとも形容しがたい独特の臭いが辺りに漂う。男はそれを確認すると走り出した。その速さは鎧を纏っていると思わせない早さだ。直に距離を詰めるとその力をも利用した一撃が顔に入る。

たった一撃でリオレウスの片眼を潰したのだ。いくらその巨体を大地へと下ろした反動で無防備になったと言ってもほんの数秒。そのほんの数秒の隙について、目の周りにある鱗を割り肉を裂き眼球を断つ。これでリオレウスは右目が機能しなくなった。

何と言う技量だろう……通常顔の近くは危険である。だからリオレウス戦の場合はヒットアンドウェイか、尻尾の付け根あたりから攻撃するのがセオリーと化している。それは、その部分への攻撃方法がリオレウスの場合だとバックステッププレスしか無いからだ。

しかし男は最初に目を潰すことにより右からの接近攻撃を可能にする。

すごい！ リサはただただ目の前の光景に感動を覚えた。あの空の王者と名高いリオレウスがまるでザコに見える。いや、実際自分が戦えば一瞬で死んでいるだろう。尻尾を振り回せば木々をなぎ倒し、突進すれば岩を粉碎し、火を吐けばその直線状の物を黒ずみへと変えるのだ。

しかし男にはそのどれもが意味が無い。まるで軽業師の様に避けではその都度斬っていく。そしてリオレウスが隙を見せれば怒涛の攻めが待っていた。

それまでの斬撃とは比べ物にならない程に力の籠った太刀が続けざまに襲い、最後に悪人を処刑する執行者の様に斬首する様な一撃が振り下ろされるのだ。

太刀使いのスキル、鬼神切り。

筋肉を十分に慣らしたあとでは無いと使えないというデメリットはあるがそれでもこの技はまさに必殺の連撃だろう。限界まで込められた力の爆発。さしものリオレウスですらその巨体を地面へと倒しもがく。

まだ三十分ほどしか経っていないだろう、本来なら一日や二日は掛かる獲物の筈なのに既にリオレウスは虫の息だ。これには男も疑問を持った。

いくらなんでも早すぎる……外傷は無かった。毒でも喰らっていたのか？

男はそんな所に疑問を思いながらもリオレウスに止めを刺すべく突進の勢いの余り倒れてしまったリオレウスの背中へと跳躍する。しかし思えば最初からおかしかった。速さが無かったのだ。突進は勿論のこと、火球の生成や飛翔する時間、尻尾を振り回すのもすべてだ。毒だけで此処まで弱まるだろうか？

男はそう思いながらも鱗が剥げ生身となった皮膚へと太刀を突き下ろす。骨を避けて内臓を突き破り下腹から出て来た太刀を素早く

引き抜くと飛翔。背中から飛び降りた。

ズズーン。と大きな音と共に地震の様な振動が広がる。これがリオレウスなの？ リサは自分では倒せる気がしなかった。何と言う強さだろう、一撃で例えハンマーを持ってしても壊せない様な岩を粉碎してるのだ。そしてそのリオレウスをまるで雑魚の様に圧倒し殺した男に強い憧れを抱いた。

自分もその領域まで登りたい！ 気づけば男の前へと走っていた。

「弟子にしてください！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1041i/>

モンスターハンター・ドキッ！ ロリコンによる小説

2010年10月9日02時05分発行